

一般口演

[0020] 一般口演020：頭部外傷：画像

2014-10-09 09:50 - 10:40 H会場（国際館パミール 1F 暁光）

1H-0020-06

重症頭部外傷慢性期患者の機能改善と脳FDG-PET所見の検討

[演者] 内野 福生:1

[著者] 内野 福生:1, 小瀧 勝:1, 岡 信男:1

1:千葉療護センター脳神経外科

【目的】 重傷頭部外傷慢性期患者において外傷後数年経過後でも機能改善を認める例があることがある。当院の入院患者において機能改善と脳FDG集積の変化について検討した。

【方法】 68例の患者（外傷から6か月以上経過、17歳から64歳、平均39歳）において、入院時とその後22か月（平均）で2回FDGPET検査を施行した。機能改善の評価はCHIBAスコアにて行い、機能改善が5点未満の非改善群、改善が5点以上の改善群の2群に分類した。FDGPETの評価は、全脳および視床の集積SUVavg（集積のpeakから50%領域におけるSUV値）にて行った。

【結果】 25%（17/68例）において機能改善を認めた。非改善群であっても右視床および全脳の集積は増加した。しかし左視床では有意な増加がなかった。一方、改善群では両側視床および全脳で有意な増加を認めた。症状改善に関連する因子として初回PETにおける左視床の集積程度、2回のPET間の左視床集積の増加、そして外傷から入院までの期間が短いことが挙げられた。

【結論】 慢性期重傷頭部外傷でも、入院加療によりある程度の機能改善が期待できる。FDGPETによる集積評価は、慢性期重傷頭部外傷患者の機能改善の指標となる可能性がある。